

フランス留学で得たもの

お茶の水女子大学 学部教育研究協力員

遠藤隆子

私が留学したパリ第6大学は、パリのほぼ中央に位置する5区にある別名マリー・キュリー大学という、ノーベル物理学賞やフィールズ賞受賞者を多数輩出してきた理数系に強い名門大学です。5区は、大学や研究所が集まるとても治安が良い街です。パリ第6大学の近くには、パリ植物園やリュクサンブール公園があり、キャンパス北東にはセヌ川が流れています。研究が早く終わった日やお昼休みなどに足を運びくつろぐのに最適です。



リュクサンブール公園

受入研究室は、理論物理学の研究室で、フランスらしい自由な雰囲気の下、セミナーの時間も毎度臨機応変に対応してくれる、誰しものが続けやすいシステムでした。今回は、妊娠中の留学だったため、この点大変助かりました。フランスでは、研究機関のみならず女性が子育てをしながら働きやすい職場環境が充実しており、子育て世代の8割以上の女性が働いています。例えば、子供の手当てが充実しているだけでなく、育児休業にも完全に休業にするか勤務時間を短縮するかが選べるなど、会社か子供の二者択一式ではなかったり、幼稚園を含め学校が終わる時間が遅めになっていたり、託児所やベビーシッターが充実していたりしました。研究室は、学生さんが2人、秘書さんが1人と小規模でしたが、皆さん明るく親切な方で過ごしやすい環境でした。朝はコーヒー片手に学生さんと一時間ほど雑談をしつつ、研究をし、お昼は学食か大学近くのレストランに食べに行き、午後はそのまま家に帰る人もいれば、夕方まで研究や勉強をする人もいました。ただ、日本のように、夜遅くや休日に研究室にいる人はいなかったことが印象的でした。welcome party や farewell party, 食事会などもありましたが、必ずお昼時で家族同伴の人が大半だったことも印象に残っています。「夕食は家族で過ごすプライベートな時間」という風潮があるようでした。受入教員の Debbach 先生は大の親日家で、日本にも一年に3,4回ほど行かれているようで、日本文化に詳しく、研究室では日本の話題で盛り上がることもしばしばでした。

実際に私がパリ第6大学に留学していたのは、2015年10月から半年間でしたが、夫の仕事の都合で、2014年4月からフランスのパリ近郊に滞在していました。渡仏した2014年4月から留学までの約一年半は、日本の研究グループと共同研究をしており、家で研究を進め、skype



エッフェル塔から見たセヌ川

や一時帰国した際にディスカッションをし、論文にまとめる、というスタイルを取っていました。これは、実験のない数学系の研究故に出来たことでもありました。

また、渡仏当初はフランス語が全く分からず、ラジオのフランス語講座を聴いたり、フランス語学校に通ったりしました。フランス語学校は、滞在許可証の更新のために必要なものでもありました。私の場合、フランス語の上達に最も効果的だったのは、何よりフランスでの日常生活でした。例えば、買い物や近所の方たちとの会話や各種手続きは、フランス語が分からないと出来ない状況だったため、辞書を片手に外出する日々でした。英語は観光地でもない限りほとんど通じなかったのです。渡仏から1年もすると、かなりのフランス語が聞き取れるようになっていたことは、渡仏当初は想像もしていませんでした。

留学中は、私の専門である量子ウォークと宇宙物理学の接点を模索しました。現在、多くの分野の研究者が量子ウォークを研究し、各分野が発展すると同時に量子ウォーク分野自身も発展しています。私は応用数学が専門で、留学当初宇宙物理学に関する知識はほとんどありませんでしたが、研究ディスカッションや論文の輪講の際は、基本的なことであっても質問をすると丁寧に教えて頂き、ありがたかったです。また、極力分野間の壁を作らず、あらゆる分野の知見を総動員し研究を遂行しようとする姿勢は、新鮮で、分野横断型の研究をする私にとって得るものが多かったです。物理学、数学、哲学、など複数の博士号を持つ方も少なくありませんでした。

パリ第6大学留学2か月目の2015年11月、パリ中心部で劇場を中心とする大規模な連続テロがありました。事件があった際、私は日本で開催された量子ウォークの国際会議に出席していたため、幸いにも難を逃れましたが、フランスに戻るとこれまでの陽気さはなく、銃を持つ警備員があちこちにおいて物騒な状態になっていました。一時、地下鉄に乗るのも怖く、外出もままならなくなってしまいました。しかし、せっかく留学していて何もしないのももったいないと思い、研究室の方々とはしばらくメール等で研究のやり取りをしつつ、少しずつ大学に行けるようになりました。研究は、なかなか新しい結果が出ず、半年間では論文にまとめるところまではいきませんでした。留学終了後も研究を進めています。

また、フランス滞在中に「若物会」といって、フランスで活躍する日本人の若手研究者の集まりにも参加をさせて頂きました。若物会の方々とは、研究を始め、フランスの住民登録関係の手続きに至るまで、本当にお世話になりました。多くの有益なご助言を頂き、ありがとうございました。日本に戻った今でも連絡を取り合っており、良い同志に恵まれました。

フランス滞在中は、芸術や食などフランス文化についても多く触れることが出来ました。ルーブル美術館を始め美術館に通ったり、スーパーやマルシェで食材を買って調理をしたり、ノルマンディー地方やニースに旅行に行ったりしました。また、春のイースターや



日々の食材

7月の革命記念日のパレード、秋の収穫祭などに行ったりもしました。

フランスでは、「家族を大事にし、自分らしい人生を楽しみなさい」という言葉をよく耳にしましたが、何を成すにもまずは心の状態を良くし充実させること、という精神があるように感じました。大学に来て、机にかじりついているばかりが研究ではなく、日々の人間らしい充実した生活から良いアイデアが出ることを教えて頂いたように思います。フランス滞在を経て、日本の良さについてもたくさん気づかされることもあり、日仏双方の魅力を知ることが出来ました。このような素晴らしい経験が出来たのも、支援して頂いた方々、家族、友人らの支えがあつてのことと思っております。

最後に、日仏理工協会のご支援、湯浅年子記念特別研究員、そして、仏政府給費留学生の機会を与えて下さった方々に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



モンサンミッシェル



クリスマスのシャンゼリゼ通り